

2016年6月5日

福音書からのメッセージ

主はこの母親を見て、憐れに思い、「もう泣かなくともよい」と言われた。

(ルカによる福音書7章13節)



そのときイエス様は、棺の元で泣き続けるやもめの女性に言い

ました。「もう泣かなくともよい」。こう言ったイエス様の表情はどうだったのでしょうか。怒りながら言ったのでしょうか。笑いながらでしょうか。わたしは思います。きっとイエス様も目に涙をためて、いや涙を流しながら母親に語り掛けたのではないだろうか。

もうあなたは泣かないでいい。その涙は、わたしが引き受けた。あなたの悲しみは、わたしが一番よく知っている。そしてそのイエス様の言葉は、わたしたちが悲しみの中にいるときにも、いつも語り掛けられているものなのです。

わたしたちの人生の中には、苦しいことも、悲しいことも何度だってあります。しかしイエス様は、ここでわたしたちに約束されているのです。わたしたちの悲しみを、いつだって共に背負うということ。わたしたちが涙を流すときには、イエス様も共に涙を流してくださるということ。

イエス様はわたしたちに、いつも共にいるということをお約束してくださいます。そしてわたしたちの気持ちを共感し、寄り添ってくださるのです。これこそが、わたしたちに与えられた大きなお恵みなのです。

二つの行列が出会いました。一つはイエス様を中心とした行列。その中には弟子たちや大勢の群衆が一緒にいました。イエス様の言葉を聞き、またイエス様によっていやされてきた多くの人たちに出会い、喜びに包まれた行列でした。そしてもう一つの行列は、墓場へと向かう行列でした。一人の人の死によって、悲しみに包まれた行列です。その中心には一人の母親がいました。

喜びの行列は、悲しみの行列によってさえぎられました。しかし喜びの行列の中心にいたイエス様は、真っ直ぐ棺の横で泣き続ける母親の元へと向かいました。

彼女の悲しみ、それは息子が死んでしまったという事実と直面した涙でありました。そしてまた、彼女のこれからの人生に、起こると思われる出来事に対しての悲しみでもありました。彼女はやもめでした。夫に先立たれて、一人息子と二人だけで生活をしてきました。現在の日本では、女性が一人で生きていくことも珍しくはありません。しかし当時のイスラエルでは、女性が自分で生計を立てて暮らすことはとても難しいことでした。

つまり女性にとって、一人息子の死は、自分の生活のすべを失うことを意味したのです。大勢そばに付き添ってきた町の人たちも、みんな悲しみに包まれていました。なぜならば、彼女がこれから置かれる状況を、みんな分かっていたからです。助けたくても、自分たちだって生きるのが精いっぱいです。どうすることもできない。だから悲しみの行列になるのです。

桃山基督教会

〒612-8039

京都市伏見区御香宮門前町 184

TEL/Fax 075-611-2790

メール momoyama.kyoto@nssk.org

<教会ホームページ>

<http://momoyama.hannari.com/>